

1. はじめに

【patient】は名詞で「病人、患者」という意味です。私たちにはなじみがある単語の一つです。この単語は形容詞で「辛抱強い、忍耐強い、たゆまず働く」という意味です。つまりpatientとは「苦痛に耐える人」という意味で用いられていることになりました。確かに外傷による痛み、疾患による倦怠感、日常生活が送れない焦りや苛立ちに患者さんは曝されています。ですからそういったものに耐えている、という意味でpatientという言葉は状況を言い当てていると言えるでしょう。しかし私たち看護師はそれを傍観していいのでしょうか。対象者を耐える人のままにしておいていいものでしょうか。実は看護師にもまた持つべき忍耐が確かにあります。「そうは言っても患者さんと同じように苦痛を感じていては仕事にならない」という声もあることでしょう。本稿では臨床において看護師が忍耐するとはどういうことなのかを考えています。

2. ケアを構成する「忍耐」

メイヤロフはケアの重要な要素として「忍耐^{*}」を上げています。これはケアを行う側のことを指して述べています。なぜケアがなされる中に忍耐があるのでしょ

シリーズ『看る』 ということ

～看護師の私は何をする人ぞ～

第8回 「忍耐」について考える —相手に身をゆだねる—



株式会社N・フィールド
居宅事業本部 教育専任室
精神看護専門看護師 中村 創氏

とも述べています。メイヤロフによるとケアは相手の成長を助けることなのです。植物であれば人であれば何であれ成長には時間が必要です。「芽が出てつぼみが膨らみ、花が咲くのを待ちなさい」と言われている気持ちになります。

3. あずかり知らないところでの回復

ここである男性とのエピソードを紹介いたします。彼は20代後半の青年でした。ずんぐりむっくりの体系に坊主頭、東北にいたことがあったとのこと言葉には独特の温かい訛りがありました。内気な性格であり人にものを言うことはありませんでした。そんな彼が統合失調症を患い入院することになりました。何か話していても急に話が飛び、ロゴもってしまい何を話しているのかも分からないことがしばしばでした。そしてほとんどの場面で無表情でした。「赤鬼がやって来ては自分に意地悪する」と言い、怯えて過^ぎこしていました。

私たち看護師はあの手この手で関係を取ろうと必死でした。赤鬼撃退を目的に豆まきもしました。そんな中、私的理由で私は転職することになりました。回復の兆しが見られないままの彼とも別れなければなりませんでした。

う。忍耐とは、「苦しさ、辛さ、悲しさなどを耐え忍ぶこと」です。先に述べたように患者さんが耐え忍ぶことはイメージしやすいことです。しかし、ケアを提供する側が忍耐するとはどういうことでしょうか。そのことについてメイヤロフは「花や子供の成長を強制できないのと同じく、重大な考

えの成長はこれを強制できない^{※2}と、述べています。つまり、支援する側が相手の成長を耐え忍びながら待たなければならないということです。メイヤロフは「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである^{※3}」

別れ際に挨拶をした際、彼は心ここにあらざうという感じで「どうも」と一言交わして終わりでした。私は彼の回復は別れ際が限界と思っていました。

半年ほど経って前の職場に用事があった私は久しぶりに病院の門をくぐりました。「せっかくだし」と思い、コーヒーを買うのを口実に仲の良かった売店のおばさんに会いに行きました。その売店でたまたま彼に会いました。開口一番「あ、中村さんお久しぶりです」とはつきりした口調で会釈されました。顔には表情が戻り満面の笑みでした。逆に私は驚きで一瞬間まったほどでした。私は人が持つ回復の力をありありと見せつけられたのでした。

ここで言いたいことは放ってお



いても勝手に人は回復する、というだけではありません。私が退職したのちも私の同僚たちと彼との関係は継続していました。私の知らないところでさまざまなことがあったことでしょう。大事なことは「信じて待つ」という姿勢です。それが欠如していると私のように思わぬ場面で驚くことになります。せっかくの再会を喜び合うには自分の驚きが鎮まるのを待たなければならなかったわけです。少しもつたいないことをしました。ですが嬉しい驚きでした。この時、私は「回復を信じること」「回復を急いではいけない」という側面がケアにあるということを知りました。

4. 身をゆだねること

ケアを構成する忍耐についてメイヤロフは「何かが起こるのを座視することではなく、私たちが全面的に身をゆだねる相手への関与の一つのあり方なのである^{※3}」「相手に生活していく上でのゆとりを与えるのだと言った方がより適切な表現であろう^{※4}」と述べています。目の前の人の回復を信じられない、この人はどうして私の言うことを聞いてくれないのか、病床にいと少なからず思うこともあるでしょう。余裕がない時は特にそうです。時に「あんな

人が良くなるはずない」と思う場面もあるかもしれない。例えば自殺未遂で短い期間内に複数回搬送される方、糖尿病治療で入院している

のに隠れて間食している方、入院を繰り返すアルコール依存症の診断を受けた方、などです。時に無力感を惜しげもなく私たちに提供してくださいます。時に怒りを感じる方もあるかもしれません。そんな時「人間はつねに、生成、進化、変化のプロセスの中にある^{※5}」という言葉を思い出し、「今は成長の過渡期にあるのかもしれない」と一呼吸置くというのはいかがでしょうか。その時、難しくても花開く時を見ることができるとも花開かせません。「大きくなったねえ」と頭を撫でる甥っ子を見るような高揚感に包まれることがあるかもしれませんが。そのために必要なものが忍耐なのです。相手の成長を信じ時間に身をゆだねることも必要なのです。「Be patient.」と使うと「気長に待とう」という意味なのだそうです。「patient」という立ち振る舞いは私たちにこそ必要な言葉なのかもしれません。忍耐はいつか晴れると信じる



から私たちは患者さんの痛みに寄り添えるのではないのでしょうか。忍耐とともに過ごす寄り添いの先にゆとりが生まれるのです。

参考文献

- ※1 Mayeroff, M. (1971/1998). 田村真, 向野宣之(訳), ケアの本質 生きることの意味(p. 43). ゆみる出版.
- ※2 Mayeroff, M. (1971/1998). 田村真, 向野宣之(訳), ケアの本質 生きることの意味(p. 43). ゆみる出版.
- ※3 Mayeroff, M. (1971/1998). 田村真, 向野宣之(訳), ケアの本質 生きることの意味(p. 44). ゆみる出版.
- ※4 Mayeroff, M. (1971/1998). 田村真, 向野宣之(訳), ケアの本質 生きることの意味(p. 44). ゆみる出版.
- ※5 Travelbee, J. (1971/1974). 長谷川浩, 藤枝知子(訳). トラベルビー 人間対人間の看護(p. 36). 医学書院.